

令和4年度「ユニバーサルデザイン教育」の取組について

宇部フロンティア大学附属幼稚園

本園では、令和2年度から3年間、宇部市教育委員会が主管する「ユニバーサルデザイン教育推進事業」の指定を受け、その推進に取り組んできました。

1 「ユニバーサルデザイン教育」とは

「ユニバーサルデザイン教育」とは、配慮の必要な園児であるかないかにかかわらず、すべての教師がすべての園児に対して日常生活の中で支援や環境の構成などの配慮を行うことを意味します。

幼稚園においては、幼児が主体的に活動できるように環境構成を行うことが重要であり、元々、配慮の必要な園児に限らず、様々な環境構成の工夫が行われています。そのため、幼稚園における環境構成のユニバーサルデザイン化は、新たに何かを行うというよりも、元々行われている環境構成を基盤にして、配慮の必要な幼児にとってよりわかりやすくするために必要な工夫を行うという視点を加えたものと考えられます。

本園では「ユニバーサルデザイン教育」に係る教職員研修に取り組むとともに、「保育のユニバーサルデザイン化」及び「教室環境のユニバーサルデザイン化」を推進していきます。

2 目標

すべての園児にとって生活しやすい学級づくりを整備し、すべての園児が集中して活動できるようにする。

3 教育のユニバーサルデザイン化のための6つのポイント

本園では、教育のユニバーサルデザイン化に必要なポイントとして、以下の6点を挙げて、取組を進めてきました。

- | | | |
|---------|---------|------------|
| ①場の構造化 | ②ルールの確立 | ③指示の出し方 |
| ④刺激への配慮 | ⑤生活の見通し | ⑥集中・注目のさせ方 |

4 今年度の具体的な取組

(1) 教職員研修の実施

- ・5月19日「特別支援教育・保育専門研修」に Zoomで参加、園内研修を実施
- ・6月2日「特別支援教育」「発達障害」「インクルーシブ教育」等について園内研修を実施
- ・7月8日「保育のユニバーサルデザイン化」について園内研修を実施
- ・8月3日 特総研夏のセミナー「インクルーシブ保育」Zoom研修に参加
- ・8月5日「宇部市ユニバーサルデザイン教育推進研修会」に Zoomで参加
- ・9月3日「新たな時代の人づくり講演会」(山口県セミナーパーク)に参加
- ・10月19日「幼児教育トップセミナー」に Zoomで参加
- ・12月7日「教育課程」「保幼小連携教育」について園内復伝研修を実施
- ・2月1日「ユニバーサルデザイン教育」について園内研修のまとめを実施

(2) 日常の保育実践

令和4年度は、「教育のユニバーサルデザイン化」に必要な6つのポイントのうち、特に、①場の構造化、②ルールの確立、③指示の出し方について重点的に取り組み、園児を取り巻く環境（教師の指導方法、教室環境の整備等）の改善に努めるとともに、④刺激への配慮、⑤生活の見通し、⑥集中・注目のさせ方についても取り上げ、総合的に実践してきました。

①場の構造化

◆片付け・整理整頓

発達障害のある子どもたちは「変化が苦手という特性」があります。保育室内で使う物の置き場所が日によって変わると、不安になりイライラするなど、気持ちが落ち着かない場所となります。

物の置き場所を決めるときは「何を、どこに、どのように置くか」を「ラベルを貼る、かごを準備する、見本の写真を貼る」など、視覚的に分かりやすく示すことが大切です。どの子にとっても保育室内でよく使う物（マジック、色鉛筆、折り紙など）や玩具が決められた場所にあることで、落ち着いて活動することができます。

また、使った物は元の場所に戻すというルールを決めて指導する中で、次に使う人のことを考えた思いやりの心も育てることができます。

本園でも、保育室の玩具や砂場の道具等について、片付けのルールを明確化するとともに、「片付けの仕方」を視覚的な情報で示すことで、満3歳児から年長児まで、どの子も自分で仕分けして、教師が手伝えることなく片付けることができるようになってきました。

トイレのスリッパの整頓については、なかなか習慣化できませんでしたが、最近では多くの子どもたちが気を付けるようになってきました。



トイレのスリッパの整頓



砂場の道具の片付け



部屋の玩具の片付け

②ルールの確立

発達障害のある子どもたちは「想像することが苦手」という特性があります。目に見えることや具体的なことを理解することはできても、目に見えないこと（言葉で言われたこと、暗黙の了解であること、人の気持ちを考えて行動すること、場の雰囲気を見て行動すること等）は苦手な場合が多いようです。学級内には様々なルールが必要ですが、目で見て分かりやすいもの、実行できそうなものにする必要があります。

そこで、園内や保育室内での日常のルールについて、具体的、視覚的に示すことにしました。次の2点は具体的な実践です。

◆声の大きさの調整

音に過敏な子がいるので、保育室での「声のおおきさ」を動物のイラストで表示し、室内ではネズミの声かウサギの声で話すルールを意識させています。新型コロナウイルス感染症対策のためにも、室内で大声を出さないことに取り組んでいます。

◆廊下や室内での過ごし方

保育室や廊下での衝突事故を防ぐために、「しずかにんじゃ」を合言葉にして、室内や廊下では走らないルールを意識させています。集団で移動するときには、2列で一言もしゃべらずに移動しています。



③指示の出し方（シンプル・クリア・ビジュアル）

◆わかりやすい指示

話をする前に、まず、教師：「〇〇組さーん」、園児：「はーい」などの呼びかけや「手遊び歌」などで、教師の方に集中するよう注意を促します。

そして、一度にたくさんの指示を出すと混乱するので、「指示は短く、一つの指示で一つの内容」を原則とすることを徹底しています。

また、「しっかり」「ちゃんと」などの曖昧な言い方をしないで、「先生のお顔を見ながらお話を聞きましょう」「2列に並んで、『しずかにんじゃ』でホールに行きましょう」など、どの子にも理解できるように具体的に指示を出すようにしています。

◆視覚的な情報による指示

お話をする時は、できるだけ具体物を用意し、具体的で簡潔な言葉で次の行動を知らせます。また、「時計がゼロになるまで一生懸命練習しましょう」「時計の色がなくなったら終わりにしましょう」など、タイマーを活用して時間を視覚的に示し、見通しをもたせるようにしています。



年長児用タイマー

◆シンプル・クリア・ビジュアル

本園においては、「シンプル・クリア・ビジュアル」を徹底し、どの子にも分かりやすい指示に努めています。

シンプル……指示は一つずつ

一度に多くの指示を出さず、大事なことを絞る。余分な刺激をなくすために、子どもたちが活動をしている最中に次の指示や説明をしない。

クリア……具体的に伝える

「ちゃんと〇〇して」「しっかり△△しなさい」ではなく「何をどうすればよいのか」を具体的に短い言葉で伝え、活動の順序や方向・内容を明確に示す。

ビジュアル……見える指示・残る指示を

新しい情報を取り入れるとき「目で見て」理解するタイプの子どもに対応するため、口頭での指示だけでなく、情報を掲示やメモで視覚的に示し、あいまいな状況をなくす。

④刺激への配慮

◆保育室の環境の整備

どの子にとっても、保育室の前面に掲示物が多かったり派手すぎたりすると自然に視線が向いてしまうものですが、特に発達障害のある子どもたちは「刺激に対して反応しやすい」という特性があります。視覚刺激や聴覚刺激に過敏に反応してしまい、気が散って一つのことに集中できない子について、まず、落ち着ける教室環境をつくる必要があります。

本園では、 unnecessaryな掲示を取り除く、掲示物を乱雑に貼らないなどに留意して、保育室の前面を意識的にすっきりさせるように心がけています。

また、音の刺激に対して過敏な子がいるので、室内での声の大きさについての指導を行うとともに、部屋の騒音防止のために防音マットを敷いて、床の音の軽減に努めています。

◆クールダウンスペース

キッズテントを各保育室に設置し、クールダウンスペースとして活用できるようにしました。特に発達障害のある子は自分の感情のコントロールがうまくできないため、ある程度周りの刺激を遮断できる狭いスペースで、落ち着いてから次の活動に取り組むようにしています。



クールダウンスペース

⑤生活の見通し

◆見通しの持ちやすさ

子どもたちの中には、これから起こることの予測がつかないと不安に感じたり、急な予定変更に混乱したりする子がいるので、今日の予定やこれから行う活動について、事前に話をするよう心がけています。そうすることで心の準備ができ、課題への集中力が高まります。

また、作業時間などもタイムタイマーで残り時間を視覚的に示すことにより、集中力を持続させ、次の活動に移る時にパニックを起こすことが少なくなりました。今後は、一日の流れや作業工程などの提示の工夫について研修を深めていきたいと思えます。



年中・年少児用タイマー

⑥集中・注目のさせ方

◆絵カードの活用

しゃべることが苦手でコミュニケーションが取りにくい園児に対しては、音声だけで、あるいは文字だけで伝えるよりも、イラストが描かれた絵カードや写真を用いた写真カードを作成して示すようにしています。また、園児が自ら絵カードや写真カードを指差して「〇〇したい」ということを教師に伝えることにも活用しています。

「絵カード」を活用することにより、少しずつコミュニケーションが取れるようになってきました。給食前に座って待てなかった年少児も、担任と副担任が根気強く絵カードで示すことにより、座って待てることが多くなりました。また、トイレトレーニングにも活用しています。



絵カードの例

5 成果と今後の課題

3年間「ユニバーサルデザイン教育推進事業」に取り組んできましたが、その子その子に合った目標を教師が設定することができるようになってきたと思います。すべての子に同じことを要求するのではなく、この子はここまでできればいい。この子はこれ以上のことができる。など、個に合った目標を立てて子どもたちに接することによって、子どもたちの行動にも余裕が出てきたように感じます。

また、子どもたちだけでなく、先生方の対応にも余裕ができ、支援の先生方と連携を図りながら、全体の指導に集中できるようになってきました。それは、まぎれもなく、子どもたち一人ひとりを見る力が付いてきたことの裏返しではないかと思います。

コロナ禍にあって、外部講師による研修会やオンラインではありましたがユニバーサルデザイン教育や特別支援教育、インクルーシブ教育等について大変有意義な研修会をもつことができたのも、このような研修の機会が与えられたからではないかと思います。この「ユニバーサルデザイン教育推進事業」がきっかけとなり、すべての教職員がユニバーサルデザイン教育の理念に基づいて実践できるよう、これからも研修を深め、実践していきたいと思います。

新型コロナウイルス感染症の影響で、公開保育については実施ができませんでした。成果を発表・披露する場として、以下に実践記録を掲載します。

6 実践事例

<事例1> トイレのスリッパそろえ（3歳児）

6月のある日、A男はトイレに行った後の外遊びが楽しみでトイレのスリッパをそろえようとしない。その姿を見たB男が教師に言った。

B男「先生、A男くんがスリッパそろえてないよ」

教師「A男くん、スリッパをそろえないと、次のお友達が履きにくくなるよ」

と伝えると、A男は、すねてピアノの下に隠れて話を聞かないように手で耳をふさぐ。

教師「話を聞かないとそろえ方が分からなくなるよ。一緒にやってみようよ」

と、A男にやって覚えてもらうように声を掛けた。するとA男はうなずき、教師に教えてもらいながらトイレのスリッパをそろえる。

その日の午後、また同じ場面があり、B男がA男のそろえていない姿を見て、

B男「スリッパそろえないといけないんだよ」

と伝える。A男は朝の出来事を思い出し、すぐにスリッパをそろえるが左右反対になる。教師は左右反対になっているスリッパに気付き、

教師「A男くん、反対だよ」

と言いながら、手をスリッパに見立てて左右反対が分かるように伝える。

2週間後、C男がスリッパをそろえずに遊びに行く姿を見たA男は、

A男「C男くん、スリッパをそろえないといけないんだよ」

と伝える。C男は教師の顔を見て唾然としている。

教師「C男くん、A男くんがスリッパをそろえることを言ってくれたね。次の友達が履きやすいようにそろえてね」

するとC男はスリッパをそろえるが左右反対になる。A男は左右反対なのを見て、

A男「これ（スリッパシール）見て。反対になっているよ。こうだよ」

と直しながら教える。C男は、それを見て、うなずいて遊びに行く。

教師「A男くん、スリッパのそろえ方が分かってきたんだね。C男くんにも教えてくれてありがとう。」

A男は教師の顔を見て

A男「僕ね、もうスリッパそろえられるようになったよ。見てて」

と笑顔で言い、スリッパをそろえる姿を見せる。認めてもらったことが嬉しくなり、他に出来ていない友達に「こうやってそろえるんよ」と教え、教師の顔を見て嬉しそうな顔になる。その姿を見た他の友達が次々にそろえていく。

A男は、スリッパをそろえないことで毎回友達に注意されていたが、自分でそろえなかった。教師はA男に自分で気付いて身に付けてほしいと思い、まずは一緒にやってみるように勧めた。何度も教えるとしろえるようになってきたが習慣付かなかった。このままだと左右反対のまま覚えてしまうと、ユニバーサルデザインで取り入れたスリッパシールを貼って様子を見ることにした。

最初は、A男はどの向きにすると友達が履きやすくなり、また、左右反対を正しい向きにするためにはどうしたら良いのかが分からない様子であった。しかし、スリッパのシールを貼って視覚的に理解できるようにしたことが、自らそろえるきっかけとなり、友達が教えてくれたことや、逆に友達に教えることも、自分でそろえようとする意欲につながったのではないだろうか。



トイレのスリッパそろえ

<事例2> 自分でわかる、できる給食の準備（4歳児）

給食の準備が始まり、当番表のホワイトボードを見ながら、

D子「今日はお当番」

E子「今日は、黄色だからざ～んねん」

F子「今日は…D子ちゃんだね」等の声が聞こえる中、

G男「今日は箸？スプーン？」と教師に尋ねる。

教師「そうだ、みんなも見て」と、ボードの前に行く。

教師「このカードの横に、箸があったら箸の日。スプーンがあったらスプーンの日だからね」

と、マグネットで作った箸とスプーンを見せ、

教師「今日は箸の日ね」と、張り付ける。

D子「朝、見たよ」

E子「これどうしたん？」

教師「これを見たら、みんな自分でできるもんね。先生が話せないときも大丈夫？」

子どもたち「わかる」「できるよねー」等、口々に答える。



箸とスプーンの準備

一学期、子どもたちが食事のあいさつの後に箸やスプーンを準備することで、お皿に手が当たってこぼすこと多かった。それを防ぐため、準備時に教師が声掛けを行って箸等を出すようにした。しかし、どちらを使うか子どもたちには分からず、子どもの動きを止めてしまっていた。

そこで、箸とスプーンのマークを用意し、給食当番のボードに付け、子ども自身が見て準備できるようにした。給食当番は子どもたちの楽しみな活動で、給食当番表を必ず確認しており、同じ場所に貼ることで気付きやすく理解も早かった。また、視覚的な情報は字の読めない子にもすぐにわかり、「自分でわかる、できる」という喜びを感じているようだった。また、自分で見て準備ができるため、自主的に自信をもって行動しているように見えた。そのことで、教師が動く際もゆとりができ、全体の流れもスムーズになった。

<実践事例3> 自作の写真カード（3歳児）

自分の気持ちを言葉で伝えることが難しく、時々奇声を発したり、教師の言っている言葉の意味を理解しづらかったりするH男が、安心して過ごすことができるように、どのような支援や配慮、周りの環境づくりをするとよいのかをH男の姿を追って振り返ってみた。

H男は、朝のバスで到着後、他の子が遊んでいる玩具に目が行き、朝の準備が後回しになってしまう。そこで、登園した時、遊ばずに朝の準備ができるように写真カード（タオル掛け、連絡帳、シール帳、ロッカー、トイレ、手洗い場）を作成し、朝の準備の支援を行った。



自作の写真カード

H男は、登園するといつものように自分の荷物を置いて、朝の準備を行わずに遊びを始める。教師「H男くん、朝の準備を始めよう」と声を掛けるが、H男は「んーんー」と体や首をひねったり、奇声を発したりして、朝の準備に取り掛からない。

そこで教師がタオルの写真カードをH男に見せると、H男は不思議そうな表情を浮かべながら写真カードを手に取り、自分の目の前に持って眺め始める。

H男は、写真カードの写真に見覚えがあったのか、朝の準備するテーブルに自ら急いで行く。自分のカバンを手に取り、写真と同じものを出して「ん！」とその物と写真に指をさす。

教師「そうそう！写真と一緒にだね。これは、タ・オ・ル」などを伝え、指差しながら、一文字ずつゆっくり言ったり、それを置く場所を指差して教えたりしながら一緒に準備を行う。途中、動きが止まることもあるが、手をつなぐと教師の顔を見て一緒に朝の準備を終える。

教師「最後まで出来たね！準備が終わったから遊んでいいよ」と伝えると、H男は「ん！」と声を上げ、早々に自分の好きな遊びを始める。

一週間後、H男は登園すると、自分のカバンを床に置き、テーブルの上に置いてあった写真カードを見つけてしばらく眺めていた。すると自らカバンを開け、朝の準備を始めた。自分で一枚ずつカードをめくり、一枚めくっては、写真カードを指さし、自分のカバンの中にある同じものを出して、カードと自分の荷物を交互に確認していた。確認が終わると準備する場所を探して、その準備を行っていた。一つできると教師の顔を見たので、「そこで合っているよ！」と伝えると少し笑顔になり、次々と準備を進めていった。

カバンの準備が終わり、トイレのカードになると一度動きを止め、どこにトイレがあるのかを考え始めた。教師がトイレの場所を教えずに待つと、しばらくして思い出したのか、H男は教師の顔を見て「ん！」とトイレを指さした。教師がうなずき「合っているよ」と伝えると、自らトイレに行き排尿できた。トイレから出てきたH男に「自分で出来たね！すごいね！」とほめると、硬い表情が少し和らぎ、次の手洗い場のカードを見て足早に手洗い場に行った。すべてのカードがなくなったことを確認すると教師の顔を見たので、「H男くん。一人で出来たね！頑張ったね」とほめると、とても嬉しそうな表情を見せて遊び始めた。

H男は、写真カードを使用する前は朝の準備が自分でできなかった。言葉や指差だけでは教師の指示が理解できず、一人で行動できなかったのではないかと思う。

自分の思いを表現することが難しい子どもたちに対して、どのような支援をすることでその子が過ごしやすくなるのかを個々に考える必要がある。そして、その子にあった支援方法を見つけていくには、子どもの興味、関心を捉え、安心感が得られるような環境づくりを心掛けることが大切である。

<実践事例4> 友達のいいところ見つけ（5歳児）

進級当初より、年中時からの仲よしの友達と数人のグループで落ち着いて遊んでいる中で、I男はどの遊びの輪にも入れずに友達の遊びを傍観していたり、一人で遊んでいたりが多かった。I男は落ち着きがなく、友達に自分から関わろうとするが、乱暴な行動をとったり、わざと人の嫌がる行動をとったりするなど常にいざこざが絶えない。また、教師に対しては、べったりと甘えてくるが、話は聞こうとせず、注意をすると反抗的な態度を取ってしまうことが多い子どもである。

できるだけ早く、クラスの子どもたちにI男を仲間として受け入れてもらうには、I男のことをよく知ってもらうことが大切だと思い、しっかりと関わりがもてる5～6人でのグループ活動を多く取り入れるようにした。

9月、誕生日の友達にグループで席に着いて誕生日カードを書いている。

教師「みんなお字を書くのが上手になったから、そのお誕生日のお友達のいいところも書いてあげられるようになるといいね。」

J子「先生、どんなことを書いたらいいの？」

教師「例えば字が上手だねとか優しいねとか足が速いねとかなんでもいいよ。」

J子「分かった。K子ちゃんに書くこと決まった。」

I男「ぼく、分かん。」

J子はカードに文字を書き始める。

I男「J子ちゃん、何って書いた？見せて。」

J子「いいよ。でもI男君、読めるの？」

I男「ぼく、字、読めるよ。『K子ちゃん、いつもやさしいね』って書いたんでしょ。」

J子「I男君って本当に字が読めるんだね。」

I男「ぼく、本も読めるから。」

J子「すごい。I男君が読めるってびっくりした。」

I男「ぼく、すごいでしょ。」

教師「I男君、すごいよ。頑張ってるね。J子ちゃんもK子ちゃんのいいところ探しができたからそれもすごいよ。」

2学期になってグループ替えをして初めて誕生日カードを書いた。I男は字や絵を描いたりするのが得意ではない上に雑に仕上げてしまう。そんなI男が字をすらすらと読んだのにJ子はびっくりした様子だった。I男は日頃は、自分から進んで字や絵を描くこともほとんどしなかったが、毎月の誕生日カードをグループで書く時は友達と話をしながら楽しそうに書いていた。また、I男は、J子に認められたことがとてもうれしかったようで、その後、他の友達にも自分が字を上手に読めることを話していた。J子が、I男が字を上手に読めることを発見し認めてあげたことや、I男が人から褒められることのうれしさを感じられたことが、友達のいいところさがしにつながったのではないかと思う。

学期ごとに男女混合で、できるだけ今まで一緒になっていない友達とグループ作りをした。そのグループ活動を通して、できるだけ多くの友達としっかりと関わることで仲間意識が持てるようになり取り組んできた。これまで話す機会が少なかった子どもたち同士も一緒に活動することでその友達のことをよく知ることができた。友達のいいところだけでなく、できていないところや意見が合わないところも見えて、言い合いになってしまうこともあったが、一緒に過ごすことなかで折り合いがつけられるようになってきた。

自分からはなかなかコミュニケーションが取れないI男に、周りの子どもが上手に関わり、時には手助けすることで信頼関係もできてきた。I男は2学期半ば頃より、友達の名前をよく呼ぶようになり、幼稚園がとても楽しいと話し、笑顔が見られ表情がよくなってきた。色々な友達のことをみんなが認め合うことでクラスがまとまり、伸び伸びと楽しく園生活を送ることができる。特に、年長組の子どもたちはすぐに、小学校という新しい集団の中に入って行かなければならない。気の合う友達とだけ関わるのではなく、いろいろな友達と関わり、その友達の良いところを見付けられるような子どもたちになってほしいと思う。